

平成三年五月四日に点鬼簿中の人となられた奈良教育大学教授（元立命館大学教授）森本修先生のご蔵書の主要な部分が、福田晃教授・上田博教授その他立命館大学日本文学専攻の方々のご高配とご尽力とによって、立命館大学に受け入れていただけることになった。長らく森本先生にご指導いただき、また森本先生に最も近いところに居た者の一人として、心から感謝申し上げます。

森本先生はつとに知られるとおり、芥川龍之介の伝記研究界ではこの人ありと認められる精緻な業績を残された方である。ご逝去後、先生のご蔵書の整理のため何度か先生の書斎に入らせていただく機会を得たが、書架におびただしい量のノートが残されているのを見て、胸苦しさを覚えた。芥川研究に疎い私には、それらのノートに記されている内容の意義について細部にまで理解は及ばないが、それが長年にわたる一人の研究者の研究の軌跡であることを思うと、胸の痛みを禁じ得なかったのだ。おそらくこれらのノートの中には、先生が今後論文や著書として発表して行くこととされていた構想やエキスも封じられているに違いない。

少し話題がそれることになるが、私は立命館大学との関わりの中で得た特に親しくしていただいていた人々を、この数年のうち

に五人も失ってしまった。最初は大学院の同期の平田利晴君、つぎに先輩であり奈良大学の同僚でもあった本田義寿先生、そして大学院の後輩で海や山への遊び仲間でもあった田中健二君、さらには多大の学恩をこうむり仲間までしていただいた国崎望久太郎先生。このような大切な人々をつぎつぎと身近から失うたびに、私は常に心の淋しさを重ねてきた。この一〇年、世間を切り詰めた狭い世界に籠もり、ちょうど『ころろ』の先生のような生き方を意識的に続けていた私にとって、身近な人々の死はどうにも淋しくて、無性に恋しさを覚えたりもしていた。そんな中、さらに森本先生を失うこととなり、我が身の業のようなものさを感じたりしている。そして訃報に接するたびに、それらの人々が、仕残した仕事への心残りを抱いておられたであろうことを思い、胸苦しような思いにとらわれた。

特に私にとって森本先生は、一般には気難しい人ということになっていたにもかかわらず、先生が芥川研究の一方で手懸けておられた労働文学に隣接するプロレタリア文学を私がやっていた関係でか、それとも落語が好きだという趣味の共有のせいとか、ずいぶん親しくしていただき、大学の四年生以来二〇数年にわたって

ご指導いただけてきた。大学院時代に初めて学会につれて行っていただけて以来、あちこちの学会にご一緒し、酒を飲み古本屋廻りをした思い出が駆けめぐる。

亡くなられる前年（平成二年）の春の学会のあと、横浜で降り神奈川近代文学館を見、横浜の中華街で老酒を酌み交わしたのが先生とのお酒の最後になってしまった。その帰途の新幹線の中で、先生は「僕の本は散逸せんように、何処ぞの図書館へでも寄贈してくれへんかいなあ。一部分は長岡京市の図書館へでも寄贈して、孫らが、これお爺ちゃんの本や言うて見に来てくれたら嬉しいがなあ」などと言っておられた。「あほ見たいにそんな先のことを言わんと、体力付けてもう一仕事も二仕事もしてもらわんといかんですがあ」などと自分のサボリを棚にあげて言ったものだったが、翌年にはそれが本当になってしまったのだから悔しい。

しかし、このたび立命館大学の先生方のご尽力で、助手時代長らくその部屋の管理をしておられた日本文学共同研究室に、森本先生のご蔵書の中心部分（芥川の初版本や研究参考文献、および労働文学関係のもの）を「森本文庫」的な形で受け入れていただけるようになったことは、立命館が森本先生にとって母校であるばかりでなく、そこで研究者としてスタートされ長らく在籍されたところでもあるだけに（そしてなによりも、先生が立命館を愛しておられただけに）、最も理想的な形でご遺志が実現したわけで、蔵書の整理をさせていただいた者としてはこれ以上にありがたいことはないと思っている。

先生の蔵書は書斎の大半を占める移動式稠密書架に収められており、あふれ出したものはその天板の上に乗せられてあった。かつては固定式の書架で、書斎の空いた隙間ごとに色々な工夫をして、隙間に合わせた細長い書架を手作りしては「便利やろ」と自慢しておられたが、それも時間の問題でいよいよ收拾がつかなくなった結果、数年前に移動式にされたのだった。芥川関係のものだけは二メートルを超える書架に別に並べられ、他は作品と研究書を分けてそれぞれ作家・筆者の五〇音順となっていた。この辺りにも先生の几帳面さが窺えよう。

先生の蔵書の特徴は当然のことながら、芥川の伝記研究という研究の性格上芥川関係のものが一番多く、作品の初版本二〇余点（没後編集の、アフォリズム三点、詩集、句集、大導寺信輔の半生の計六点を含む）など芥川作品の単行本が四〇余点、各種芥川全集七点、文学全集ものの芥川作品集二〇余点、芥川作品文庫本三〇余点、芥川研究書等参考文献一四〇余点、そして『文章倶楽部』など作品発表誌の端本類である。とはいえ、参考文献については直接的に芥川を対象とした書物に限定した数であり、関連文献となれば相当量となる。これを多いと見るか少ないと見るかは主観の問題である。

ご蔵書中の初版本は『羅生門』『鼻』『傀儡師』『影燈籠』『夜来の花』『芋粥』『点心』『邪宗門』『春服』（『沙羅の花』『黄雀風』『百舛』『報恩記』『支那遊記』『梅・馬・鶯』『湖南の扇』『侏儒の言葉』『澄江堂句集 印譜附』『西方の人』『大導寺信輔の半生』

『文芸的な、あまりに文芸的な』『澄江堂遺珠』などであり、特に『鼻』は日本近代文学館から出た『名著復刻 芥川龍之介文学館』の編集に際し、復刻の底本として採用されている。ちなみに『芥川龍之介事典』（明治書院）掲載の『芥川龍之介著書目録』（関口安義編 没後一〇年まで）に紹介されている三一点（文学全集類を除く）の過半のものが初版本で架蔵されていることになるわけである。芥川作品についての個人蔵書の状況については知るところでないが、おそらく貴重なコレクションと言えるに違いない。

芥川関係以外では、労働文学関係、宮地嘉六・宮島資夫の作品初版本があり、特に宮島の『恨なき殺人』は貴観本と言えよう。

もう一〇年以上も前のことになるが、どこかの古書市の抽選でこの本を入手されたと聞いたことがある。その折「送ってきた本の中に荒正人の札がはさんであった。荒さん気の毒に落選したんやなあ。」と楽しそうに言っておられたのを記憶する。この度蔵書整理をしていて『恨なき殺人』を開くと確かに荒さんの札が挟まれている、その折りの先生の表情とともに一〇年以上も前のことが懐かしく思い出されたのだが、さらに荒さんの札と一緒に昭和六一年の「あきつ書店」の古書目録の切れ端が挟まれており、そこには『恨なき殺人』に十五万円の値段が付けられていた。先生は一人密かにほくそ笑んでおられたに違いない。

さきに先生のご蔵書を「多いと見るか少ないと見るかは主観の問題である」といささか失礼な言葉を記したが、芥川に関する参考文献はおびただしい数にのぼるはずであり、『芥川龍之介事典』

掲載の「主要文献目録」の単行本・単行本所収論文の項に紹介されている文献だけでもざっと三五〇余点にのぼり、おそらく先生の一四〇余点は全体の何分の一かに過ぎないと思われる。ここに先生の蔵書の特徴あるいは研究の特徴のひとつがあるとも言えよう。先生の書かれたものを見れば明らかのように、事実関係の追求には厳しく、当然のことではあるものの確認されないものやことを確認しないままに済ませるといふことはされなかった。そのためときには些末主義的な作業に執っておられるような印象を抱いたことさえあった。研究の姿勢がそのようであつてみれば、いきおい所蔵資料もとてもなく膨大なものと想像されがちである。しかし先生の場合一種の合理主義で、ものそのものへの執着はなく、図書館その他で確認されたことを克明にノートしておられたようである。その結果ノートも膨大なものになったのだろう。また必要箇所をコピーして、そのコピーを丁寧に自分で製本して所蔵しておられた。たとえば『放浪者富蔵』のコピーを所蔵しておられた。これは丁寧に袋とじ製本され、表紙その他に色鉛筆で現物に似せて色が施されているのである。おそらく先生は酒などをちびりちびりとやりながら、にやにや笑いつつこの作業をされたに違いない。これを暇つぶし、無為な徒勞と見るか、あるいは微笑ましく見るか几帳面と見るかは、これも主観の問題だろう。

ところで、立命館の日本文学科の方々のご努力で主要な文献についての目録が公表される予定と聞く。が、おそらくその目録に数点あり、それに関わる研究をしている私などからすれば垂涎の書も混じっている。学会にご一緒した折など、古書店をよく廻ったが、駆け出しの私には欲しいものが多く、あれもこれもと買い込む私を見てにやにや笑っておられたものだ。というのは先生の場合衝動買いが全くなく、多くて二三冊、場合によっては全くお買いにならず「みんなえらい高いなあ」と言ってお済まされることもあった。だからこの四〇数点の理論書も一冊一冊丹念に買いそろえてこられたものであるに違いない。

ご蔵書の紹介は尽きないがこのくらいにして、立命館大学で受け入れていただいた主要部分以外について。立命館の蔵書と明らかに重複すると思われる『日本古典文学大系』『鷗外全集』『藤村全集』『荷風全集』『志賀直哉全集』『有島武郎全集』『定本横光利一全集』『太宰治全集』『近代文学鑑賞講座』『鑑賞日本現代文学』など、一般読書家の利用頻度の高そうな個人全集・講座類二四点約五百冊が、長岡京市立図書館へ寄贈され、図書館もこれを歓迎し「森本文庫」（仮称）として受け入れられることになった旨、昨年十一月十二日の『京都新聞』に奥さま・ご長男の写真入りで大きく報じられた。ちょうど市立図書館が新築直後で、図書館としても本格的に集書に取りかかろうとしていた矢先でもあり非常に歓迎されたようだ。一昨年五月の学会の帰途ふと洩らされた「孫らが、これお爺ちゃんの本や言うて見に来てくれたら嬉しいがなあ」というご希望がこれで実現したわけで、いくら内容的に優れていても、受け入れ側に収容能力がなければ授受は成立しな

は出てこそ、しかも先生の研究態度とも密接に関わるコレクションが蔵書中にはある。それは特製段ボール箱七箱にぎっしりと詰められた「内容見本」である。これも森本蔵書の特徴のひとつに数えられるべきものではあるが、大変恐縮ながら蔵書整理に当たって、これの取り扱いについては困ってしまった。かつて谷沢永一氏によって『完本・紙つづて』で「全集叢書講座類の宣伝に配布される、いわゆる内容見本の資料価値を最初に提唱したのは森本修で」「かつて立命館大学教授・森本修が『立命館文学』四十一年七月号に内容見本研究の必要を力説して以来、ここにはじめて書誌学の新しい分野が開拓されたのをたたえたい」と評価・紹介されているように、森本先生も『立命館文学』四十一年七月号の「思想の動向」欄で「内容見本」の氾濫する今日、これを徒疎かに扱ってはならないと思う」と力説しておられ、ご自身でもせつせと内容見本や月報類を集めておられたのだ。このようなコレクションでもあり、芥川関係のコレクションとはまた違った先生の努力の結晶でもあつてみれば、ご蔵書整理にあたる者としてはやはり「徒疎かに」はできず、かといってこのようなコレクションを引き受けていただけるところがそう簡単に見つかると思えず、その取り扱いについて苦慮していたのだ。しかし、さいわい卒業生であつて森本先生のご指導をお受けになった前芝憲一氏が引き受けてくださることとなり、その価値を十分理解しておられる方の手で整理保存していただけることを感謝している。

いわけで、先生にとっても蔵書にとってもお孫さんたちにとって  
も幸せなことだったと思う

先生は伝記研究をしておられた関係で、『日本近代文学大辞典』  
のほか種々の人物事典・作家事典・文学事典を所蔵しておられた。  
それらの事典や『国語国文学研究文献目録』『国文学年鑑』『現代  
日本文芸総覧』といった近代文学についての検索資料類、および  
『近代文学注釈大系』『昭和文学全集』や先生が直接編集に携わ  
られた『宮地嘉六著作集』を奈良教育大学教育学部国語科で受け  
入れていただけることになった。

奈良教育大学へは大学院設置要員として昭和五七年に赴任され、  
九年間在任されたことになる。私の奈良大学から車で約二〇分と  
いうこともあって、研究室へは何度かお邪魔させていただいた。  
国語科研究室群は教育大キャンパスの一番東に南北方向に建つ研  
究棟の三階なので、窓からは大きく東に開ける景観を眺めること  
が出来た。先生にはあまり関心がおありではなかったようだがそ  
の景観を少し紹介すると、北から若草山・御蓋山・春日山・高円  
山・高峰山からさらに南の三輪山までの、奈良盆地と大和高原を  
区切る山塊がほぼ一八〇度のパノラマとして居ながらに飛び込ん  
でくるのである。さらにはこれらの山々は不粋な杉檜の植林がな  
されていいため様々な雑木灌木が自生しており、春にはそれぞ  
れの木々が思い思いの時期にとりどりの色の新芽を芽吹き、秋に  
は秋で木枯らしに枯葉を吹き飛ばされるまで木々はそれぞれにお  
好みの衣装を身にまとう。夏は深い緑が目にも優しく、冬は冬枯れ

の林に雪などが降ると若草山から三輪山まで、ずうーっと山々は  
ツイードのオーバーをまとった風情となる。志賀旧居などのある  
高畑や高円山の大字・柳生街道の位置などが指呼の間に見渡せ  
るのである。このような環境の地で優しい女子学生に囲まれ（今  
や女子大学化しつつあるかのごとく、先生の演習には女子学生が  
多かったようだ、不思議なことだ）、立命館とは比べものになら  
ないような少人数を相手にして指導をしていれば良いというのど  
かな生活がお出来になったことは、次第に健康状態の衰えておら  
れた先生にとって幸せなことだったと思う。

さて蔵書のことからそれてしまったが、そのような教育大学の  
国語科の先生方のご好意で、研究室の一角に「森本コーナー」  
（仮称）という形で上記の文献を受け入れていただけるというこ  
とは、森本先生にとって幸せなことである。

当初ご遺族から依頼を受けたとき非力な自分に出来るかどうか、  
正直なところ五里霧中であったが、以上のように各方面の方々の  
ご好意とご尽力によって、先生の四〇年近い研究生活の軌跡とし  
てのご蔵書は、それぞれの書物にふさわしいかたちで受け入れて  
いただけました。昨今の出版状況の中で大学図書館に限らずあらゆる  
図書館が、集書と収納力のバランスに苦慮しているのであり、い  
かにそれが価値あるものであっても時期と受け入れ側に人を得ず、  
虚しく散逸していった事例を耳にする。それだけに、受け入れる  
ための条件整備をしていたいただいた方々には心から感謝申し上げたい。  
さて、思い出をということでもあり少し記しておきたい。大学

院の一年のときだったと思う。夏、三島由紀夫の『潮騒』の舞台  
神島に仲間で行くことになり、先生にも声をかけたところ「君ら  
は知らんやろうが僕は泳ぎはうまいんやぞ。まあペロチャンペロ  
チャンと軽うに泳ぐところを見せたるわ」と勇んでついてこられ  
た。当時はまだまだお元気で、学生たちから気難しいと恐れられ  
てもいた先生の、意外に剽軽で明るい側面を發揮されたのが印象  
深い。砂浜で相撲ということになり、先生を砂に叩きつけ「お主  
なかなかやるな、もう一番」と起き上がったこられたのを再び投  
出し「どだい腰に力が入つたらん」などと囃子たてたのを思い出  
す。神島もその後ずいぶん変貌し相撲に興じた砂浜も今はない。  
少し失礼な批評めいた言葉になるが「あんまりテレてる」と誤解の  
もとになりますよ。もっとストレートに言わはった方がいいんと  
違いますか」と何度か言ったことがある。相手への親愛の気持ち  
を表現しようとするとき、何故かご自分でテレてしまつて、表  
現がカーブやシュートやチェンジアップになつてしまつてらしい。  
それについて言ったのだが、このような見方が出来るようになった  
のも神島での触合いの結果かもしれない。ご葬儀のあとご長男  
がしみじみと、「自己表現のへたな人でした」と言っておられた  
のが印象的だった。

先にも少し記したが、学会と酒と先生とは私の記憶のなかでは  
三点セットのようなもので、学会にご一緒させていただくたびに  
珍しい酒肴を探しては飲んだものだ。蝗・蜂の子・鈍魚のカラ揚  
げは序の口で、殿様蛙の姿揚げが極め付け。中には「何だそんな

ものぐらい」とお思いの向きもあろうが殿様蛙はやはりいささか  
の勇気がいったのである。東京では浅草「駒形どぜう」がお気に  
入りで、柳川鍋を何杯もおかわりし、主として泥鰌を食べるのは  
私であり、先生はその上に振りかけてグツグツ煮立てて軟らかく  
味のしみた東京葱を気に入っておられた。申し訳ないことである。  
「先生、酒ばかり飲んでとツマミをちゃんと食べんとだめで  
すよ」と小言ばかり言っていた。また新宿に信州の酒肴を出す  
「大信州」という大衆酒場があり、奥から学生たちのコンパの声  
が聞こえてくるような所だったが、ここが気に入っておられた。  
信州の珍しい食物を出してくれ、一合罎に一合グラスを入れ、そ  
こに地酒をなみなみと盛りこぼしてくるのである。「これがえ  
え、量の多いことよりもこの心意気がええ」、威勢のいい小さな  
小母ちゃんが「ハイお待ちッ！」と運んでくるのを待ちかねたよ  
うに、口の方からお出迎えに行かれる姿が眼に浮かぶ。そのグラ  
スたるや肉厚一ミリはあろうかと思われる代物で、ずしりと重い。  
外で受ける一合罎すれすれまで盛りこぼしても大した量にもなら  
ないが、この演出がたしかに楽しいのだ。

ところで、ここで先生と最後に飲んだのは一昨年の五月。昨年  
五月の学会の折、先生を偲んで一杯やろうと訪ねたところ、看板  
は降ろされ「大信州」の灯は消えていた。いささか落語的な落ち  
になって恐縮ながら、「先生、あちらでの楽しみに『大信州』を  
持って行かはったんですか」と心のうちで呼び掛けていた。

（あさだ・たかし 奈良大学教授）